タイトル：「朝鮮語史研究」（平成２０年度第２回研究会）
日時：平成２０年１２月６日（土曜日）　13:30～17:00
場所：AA研小会議室（302室）
報告者名（所属）・タイトル：
1）南潤珍（AA研共同研究員、東京外国語大学）
「現代韓国語における否定文使用の推移について-20世紀の小説資料を中心に-」
2）岸田文隆（AA研共同研究員、大阪大学）
「語学書と歴史記録　―早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」と対馬宗家文書との照合―」

現代韓国語における否定文使用の推移について
-20世紀の小説資料を中心に-

南潤珍(東京外大大学院)

現代韓国語の否定文は一般否定素‘ani/an’によるものと可能/不可能の否定素‘mwos’によるものに分けることができる。また否定素の位置によって先行否定文と後行否定文に分けることができる（前者は短形否定文、後者は長形否定文とも呼ばれる）。現代韓国語の否定文についての論議はこの‘ani/an’と‘mwos’の分布制約、長短否定文の意味の等価性、否定文の構成要素の文法的位置づけなど様々な問題を提起してきた。
本研究はこうした先行研究に基づき、1900年代から1990年代までの小説資料を対象に以下に焦点を当て、100年間という時間の連続線上での否定文の使用の傾向を把握することを目的とする。

① 年代別の否定文使用率の推移
②‘ani/an’否定文と‘mwos’ 否定文の使用率の推移
③ 否定素‘ani’と‘an’の使用率の推移
④ 長形否定文と短形否定文の使用率の推移

その結果は以下の通りである。

① 否定文の使用率は1970年代までに減少傾向であるが、1980年代以後に増加している。
②‘ani/an’否定文の使用率は‘mwos’ 否定文のそれより高い。
③‘mwos’ 否定文の使用率は減少傾向を見せるが、それと同時に不可能を表す‘swu op-’の使用率が増加傾向である。
④ 否定素‘ani’と‘an’の各々の使用率は1920年代を境目に逆転し、1970年代からは‘ani’はほとんど使用されないようになっている。
⑤ 長形否定文の使用率は短形否定文のそれより高い。
⑥ 長形否定文の使用率は1960年代に頂点に達するが、1970年代には最低となり、その後は徐々に回復している。

以上の結果から20世紀韓国語の小説資料に現れる否定文使用の概要が得られたと判断される。これからは個々の否定素の分布及び機能を調べ、その変化の傾向を掴むことで現代語の通時的変化を記述するとともに、現代韓国語の文体の成立・発達と否定文の使用との関係を明らかにしていくこととする。

語学書と歴史記録　―早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」と対馬宗家文書との照合―

大阪大学　岸田文隆

発表者は、岸田(2006)*において紹介した標記の資料「朝鮮語訳」対話篇の文例がいかなる史実に基づいているのかを確かめるため、歴史記録類、とくに対馬宗家文書の「分類紀事大綱」および「倭館館守日記」との照合作業をおこなっているが、本発表では、現在までの調査において発見された対応例を報告し、あわせて「朝鮮語訳」の編纂の経緯についても再考した。

「朝鮮語訳」の対話篇には、巻１に 85 条、巻２に 20 条、都合 105 条の文章が収められている。そのうち、現在までに「分類紀事大綱」および「倭館館守日記」の記事との対応が見出せたものは、以下に示すとおり、巻１については、全 85 条のうちただ２条のみ、一方、巻２については、全 20 条のうち２条を除く 18 条である。

「朝鮮語訳」の箇所	対話の話題	対応する歴史記事の日付
巻１： 第 39 条－第 40 条	御米漕船を古館の時のごとく二艘にすべし	元禄８年(1695) 7 月 19 日
巻２　： 第 86 条－第 87 条	禁標を建てようとするのを阻止する	元文１年(1736)12 月 28 日
第 88 条－第 89 条	館守の留館を 36 ヶ月にするようにとの申しこし	元文２年(1737) １月４日
第 90 条	脇乗の船に支給する五日次を 5 日に限るとの通達	享保 19 年(1734)11 月 24 日
第 91 条－第 94 条	第三船の水夫４０人前の加料を支給するや否や	元文２年(1737) ８月頃
第９５条－第 102 条	父親の死去により別差が上京したあとの宴享の段取り	元文２年(1737) ８月 17 日頃

「朝鮮語訳」対話篇巻２の文例のほとんどは、享保 19 年(1734)から元文２年(1737)の史実・歴史記録に対応するものであるので、本書巻２の成立年がそれ以降であることは明白である。岸田(2006)では、本書の成立年を 1710 年頃と推定したが、少なくとも巻２に関する限り、当っていなかったことを明言しておかねばならない。

「朝鮮語訳」対話篇巻２の文例が、享保 19 年(1734)から元文２年(1737)の史実・歴史記録と集中的に対応することから、本書巻２は、雨森芳洲の建議によりこの時期に朝鮮語の稽古のため倭館へ留学した杉村久右衛門、梅野松右衛門、渡嶋源右衛門、春田治助らが、指南役である雨森

芳洲の手元へ送った想定対話のレポートを材料として、語学書として編纂しなおされたものではないかと想像される。

＊　岸田文隆　(2006)「早稲田大学服部文庫所蔵の「朝鮮語訳」について　－「隣語大方」との比較－」，『朝鮮学報』199/200，天理：朝鮮学会.